

「通所事業所におけるエンターテインメントの創造と提供」

「君のカラーが見えない」、以前、ウィズの活動プログラムの活性化について悩んでいる時に、上司から言われた一言である。それから、自分にしか出来ない活動プログラムは何なのかを考えきた。ダイアクティビティーセンターは、障害のある方に日中活動を楽しんで頂く為のプログラムを提供することを目的としているのだから、どれほど重度の障害がある方に対しても、ただ介護をしていれば良いというわけではない。それを理解しているつもりでも、「楽しんで頂く為には？」ということについて食欲な追及に欠けていた。「楽しませる」、そのシンプル且つ難しい課題を、どの様にしてウィズを利用されている方に提供できるかということ自分なりに考えてみた。自分が好きなことを全力で取り組めば、わずかでも相手へその楽しさを提示できるのではないかと思いついた。もちろん個々に興味のあるものは違って当然だが、少なくとも、支援する自分自身が楽しいと思える活動を提供しない限りは、利用されている方を楽しませることは不可能だと思ったからだ。

それなら、実際に楽しい思いをして頂くにはどうすれば良いのかと考えた時、百聞は一見にしかず、体験して頂くしかないのではないかと思いついた。障害を持っている故に、今までの人生の中で、様々な遊びなどの経験が少ないのなら、まずは、様々なプログラムを体験して頂き、その中から、本人が楽しんでいる（だろう）プログラムは継続し、つまらなければ改善策を考えるとところから始めれば良いのだろう。

楽しんでいる（だろう）という表現はあまり好ましいとは思わないが、ウィズを利用されている方のご家族とお話しをさせて頂いても、今日まで障害がある子供を育ててこられたご両親やご兄弟のお話からも「たぶん好きなのでしょうね」という曖昧な返事が比較的多いという現状もある。投げやりな表現になってしまうかもしれないが、家族にもわからないことを、支援員がすべて把握することはとてつもなく困難なことだ。だからこそ、想像力を膨らませた支援が必要なのだ。利用者の方たちと、楽しみが共有ができるであろうと同世代の人間が活動を検討することも、打開策の一つになるのではないかと思いついた。

自分自身が活動の楽しさを最もわかりやすく表現し、提供できるものは何かと考えた時、自分の趣味でもある音楽の活動なら、音楽の楽しさを提供できるのではないかと思いついた。職場に様々な楽器があるウィズは、音楽好きにはたまらない、そして音楽活動を実施する場としてはとても恵まれた環境である。だからこそ、それらの楽器を活かさない手は無いと思っていた。しかし、それは音楽の活動を「楽器を演奏する」という狭い視野の中でしか捉えていないことに気付いた。音楽の動の魅力である、「楽器に触れる」ということに執着し過ぎていたのかもしれない。しかし、本当に大切なのは楽器が演奏できることではなく、「音楽」という文字が表す通り「音を楽しむ」ことではないかと思いついたのである。

これまでは、利用者の方が好きであろう（と思える）打楽器で職員が介助をしながら演奏に関わるという形をとっていた。しかし、本当にそれで楽しいのか？やらされている感になってしまうのではないかと感じた為、楽器の演奏以外にも音楽の楽しさを提供する

方法はないのか考え、その打楽器から離れ、職員が両手を大きく広げて手拍子をしてリズムをとるといった方法へ変更した。その様子を見た利用者の方は、思いのほか良い表情をされており、そのリズムに合わせて自分のペースで手拍子をし、自分なりに音楽を楽しんでいるであろうと思われる姿がとても印象的であった。

この経験を通して、音楽を聴くことや、楽器を演奏することにより、音を「聴覚」を介して耳から取り入れて楽しむだけではなく、「視覚」に訴えて見て楽しむ、または体を揺らしてリズムを刻むなど、様々な「感覚」を刺激した楽しみも得られるということに気付かせてくれた。つまり、音楽への関わり方は「何でもあり」で全てが正解で、不正解は無いと思う。最も大切なことは、その活動に参加することにより少しでも気分が豊かになること、それが実現すればこの活動を提供する意義はあると思えた。

ここ数年、ウイズの中で固定化された多くのプログラムは、今まで先輩方が長年かけて作ってきたものであり、必ずしも「自分（私）のカラー」を活かしたものではない。そうしたプログラムを利用者の皆さんが楽しんでくれれば、それらの活動は継続してより楽しさを追求したものにしていきたいとも思うが、それで満足していいわけがない。マンネリ化を避け革新性のある活動の提供が求められ、それを現実化しなければならない。

活動への関わり方は他のプログラムに関しても多種多様にある為、決まりきった支援方法は繰り返し検討し直す必要がある。固定概念としての今ある枠組みに依存しては、日中活動もただ時間が経過するのを待つだけになってしまうという恐れもある。だからこそ、常に楽しい思いをして頂く為の新しい働きかけをする必要があると思う。その結果、従来まで実施されてきたプログラムにも魅力が増すだろうし、新たなプログラムの創造・提供につながられるのではないだろうか。

通所事業所は、昴の中にも他に数カ所あるのだから、それぞれの事業所が、「売り」となるプログラムを用意し、サービスを利用される方々にとって「〇〇のプログラムに参加したいから、今日は××に遊びに行こう」という選択が可能になることで、より楽しい日中活動の提供や、地域で生活していく楽しさを感じて頂けるきっかけになるのではないかと思う。その発信地として、自分が所属しているそれぞれの事業所（私にとってはウイズだが）においては、活動の活性化の実現とより魅力的な日中活動の提供が出来る様、一人ひとりが自分のカラーを出していくことが求められている。

デイセンターウイズ・木藤 弘喜